

17世紀イングランド常備軍 (翻訳)

藤原 浩一

AN *Gal q. F. d*  
ARGUMENT,

Shewing, that a

Standing Army

Is inconsistent with

A Free Government, and absolutely  
destructive to the Constitution of  
the English Monarchy.

*Cervus Equum pugna melior communibus herbis  
Pellebat, donec minor in certamine longo  
Imploravit opes hominis frenumq; recepit.  
Sed postquam victor violeus discessit ab hoste,  
Non Equitem dorso, non frantum depulit ore.*

Horat. Epist. 10.

L O N D O N;  
Printed in the Year 1697.

## 十七世紀イングランド常備軍についての主張

献呈の辞

関係者各位へ

捕らえる者、彼がなす人である。<sup>1</sup>

あなたがたの祖国に対する大いなる情熱と、祖国への多大な貢献、またそのために数知れず自らの身を危険にさらし、私利私欲に走らない行動を考慮すれば、あなたがたへの賛辞を以下の論説の序文にすることはその功績にたいして当然といえるでしょう。あなたがたが王国の自尊心を抑え、驕りを控えさせたのである。また、あなたがたは共和国から、人々の心を墮落させたり魂を破壊するような不純物や汚物をとり除いた救済者であり聖職者である。あなたがたは枢密顧問官はあてにできず、あなたがたの指揮下の船舶には信頼が置けないと私どもに確信させました。

あなたがたは海上から海賊ではなく我が国の商船を一掃し、その結果、刑務所を兵士で満たし、倉庫のようにしてしまいました。要するに、ダビデ王<sup>2</sup>の表現を使えば、あなたがたの心は計り知れず、あなたがたの考えは理解できません。これらすべてを考慮し、あなたがたの功績とその榮譽ある地位とを比較し、あなたがたがその地位を手に入れた方法や、その地位における振る舞いを考慮すると、常備軍はあなたがたの榮譽ある地位にたいする正当な権利の防衛手段だと思わざるをえません。したがって、常備軍の創設を促進するあなたがたの政策を賞賛せずにはおれません。というのは、国王はこれらの人々を使って統治し、君主は裁きを下します。これらの人々は伊達に剣を帯びているわけではなく、私たちの裁判官となるでしょう。彼らは、アーロン<sup>3</sup>の息子のように、背中と胸にウリムとトンミムをまとい、サミュエルがギルガル<sup>4</sup>において神の前でアガクにしたように<sup>5</sup> 罪人を切り刻む聖職者となるでしょう。律法学者としてではなく、権力を持つこれらの人々によって、あなたがたは私たちに無抵抗の服従を教え込むことになるでしょう。あなたがたは、より高位の権力に逆らう根拠を得ることになり、神とギデオン<sup>6</sup>の剣によってあなたがたの神の法を証明することになるでしょう。

あなたがたの最も従順な僕、A. B. C. D. E. F. G.<sup>7</sup>

常備軍は自由な政府とは調和せず、イングランドの王制にとって決定的に有害であることを示す主張

フランスの軍事力の増大および発展によりヨーロッパの戦場での流血と荒廃の惨憺たる状況を目にすると、私たちは長い間平和と繁栄の期間を享受し続けた三度の幸運な状況を手ばなしで賞賛し、賛美することはできない。この間、私たちの周辺諸国は絶え間ない戦争によって悲惨さに苛まれていた。絶え間ない侵入に対して無防備のままでは、平穩で安全な生活を享受することは決してできず、安眠もできない。いや、それどころかヘラクレスのように手に棍棒を持って眠りにつかねばならない。私たちが世界中で荒れ狂っている嵐のただ中で享受している平和な日々は、ひとえに翼のある軍馬の護衛を引き連れた守護神ネプチューンの堅固な庇護のおかげであり、私たちは征服できない群衆のうねりのようなものと言えるかもしれない。そして不動で揺るぎなく、内部変動によってのみ振動する地球にたとえられるかもしれない。また、自然が私たちの境遇に関してこのように寛大だったので、私たちの土地の豊穡さも通商交易に適した多数の商品を産出している。また、この交易により鉱山で骨折って働かずとも東洋および西洋の金銀の所有者となり、故国に持ち帰る宝物を守る多くの強壯で熟練した水夫を育て上げている。ほとんどの国家の破滅と滅亡の原因となった贅沢の蔓延でさえ、ある意味では、決して安楽と怠惰により墮落もせず、活力も失わない人々を育てる意味では我が国民の維持に役立つものと見なされる。しかし、私たちにはこれらの幸運に加えて自慢できるものがもう一つある。すなわち、暴政の世界的な大洪水が地球全体を覆っているこの不幸な時代に、私たちは奴隷ではなく自由民だということである。それゆえに、我が国こそがノアの箱舟<sup>8</sup>であり、ここから送り出された鳩は、戻ってくるまで休息所を見つけられないだろう。

我が国の制度は、制限のある複合君主制であり、国王は自分の威厳の維持と臣民の擁護に必要な特権をすべて享受し、自分の臣民の権利を侵害する権限だけが制限されている。要するに、人間は自由であり、動物のみが繋がれている。また、我が政府は人間による統治国家ではなく法律による統治国家と呼ぶのがふさわしい。というのは、国王が王権に対して擁する権利と同様に、すべての人が労働と勤勉さにより獲得できるものに対する権利を所有している。また、最も身分の低いものも、ウェストミンスター<sup>9</sup>の法廷で自分の法的救済が可能である。自分たちが制定した法律を逸脱しない限り拘束されることはないし、同胞による以外は裁判にかけられることもない。それ故に我々は古代ギリシヤ人やローマ人もほとんど経験したことのない自由を享受している。

また、王冠に託された異常な権力が専制政治に向かわないように、あるいは国民の無秩序な放縦さが民主制へと傾かないように、私たちの先祖の知恵は、貴族という中間の階級を設けたのである。彼らの仕事は、私たちの国家であるこのボートの均衡を保ち、君主の侮辱から人々を遮り、庶民の人気から君主を遮ることである。もし、どちらか一方が他方を圧迫すれば、必ず転覆し破滅させられる。また、議会においてこれら三つの階級が集まって我々の政府を形成している。というのは、これらすべての階級の賛成が得られなければ、法律の制定もできず、臣民から一ペニーさえ徴収することもできない。したがって国王が必要に迫られてこの議会、すなわち下院を招集する。ここで国民は自分たちの不満を大胆に述べ、さらに、通常の裁判の範囲を超えて大きくなり過ぎた犯罪者を糾問するために喚問する。この政府の優越性はそれぞれの構成要素の正確な均衡にある。というのは、万一それらの一方が他の二つにとって耐え難いものであれば、政体が実質的に崩壊する。しかし、現状が維持されるかぎり、私たちは、自惚れではなく、世界で最も幸運な国民といえよう。

しかし、なんらかの不足のない幸福はありえない。また、極めて強固な身体も特定の病を免れない。したがって、我々の政府のまさにその優越性こそが、なんらかの不自由さに身をさらすことになる。政府の車輪や装置は、非常に精確で微妙なので、しばしば故障する。それゆえに我々はこの政府を調整し、守るために最大限の努力を払わねばならない。また、国民の生命、財産、および自由が君主の無法な気まぐれや野望のなすままであり、さらに役人の略奪や横柄な振る舞いにさらされ、圧政と隷属を甘受せざるを得ない蹂躪されたヨーロッパ諸国を目にし、以前はそれらの国々において自由の大胆な擁護者であった貴族階級は、今や専制君主の旗手や飾り物になりさがり、国民は荷物運搬用の動物として支配者の贅沢や浪費を支えるためだけに生かされている状況では、我が国がまだ存続しているのは、我々自身の叡知や、高潔さや勇気によるものというよりは、我々の幸運な状況のおかげだと思えるのである。

また、これらの不幸な国家がどのようにして貴重な宝石とも言える自由を失ったか、また我が国がいまだに自由を失わずにいる原因を調べてみると、彼らの苦難と我々の幸福の原因が以下の通りであるとわかるだろう。彼らは必要に迫られたのか、もしくは無分別により、常備軍を維持することを認めたのである。また、我々の場合は分別というよりは状況がそういう事態を防いでくれたのである。そうでなければ我々はずっと以前に地上で最も価値あるものを失っていただろう。というのも、先に述べたように、我が国の政体は国王、貴族、庶民の間の適切な均衡に依存しており、その均衡はお互いの特別な事情と

必要性に依存している。この結合がひとたび壊れてしまうと、政府の実質的崩壊につながる。さて、この均衡は王国の自然の力と人為的な力の結合によってのみ維持される。すなわち、市民軍を土地を持つ人々で組織することである。さもなければこの政府は暴力的となり、自然の本質に反し、持続できないだろう。そして政体が軍を破滅させるか、軍が政体を破壊することになるだろう。というのは、市民軍が存在するところはどこでも政府が存在するか、すぐに成立することは例外なく真実だからである。そしてそれ故にこのゴシック風の均衡（全ヨーロッパにおいて定着している）の創設者は市民軍を政府と同じ構成要素で編成したのである。つまり国王が將軍となり、貴族はその城と名誉により偉大な部隊長となり、土地を持つ農民が軍隊の主要部分を構成している。それで、このように組織された軍隊が自殺行為をとると想定しないかぎり、政体に不都合な行動をとることはありえない。ここで私はあえて断言するが、これ以外のものを拠り所としては、特別な事情が寄与しないかぎり、いかなる国家も自由を維持できない。そして、明らかにしておきたいのだが、政庁所在地内で他の構成要素で軍隊を保持した場合、自由を維持した国はない。さらに言わせてもらえば、過去に起こったことは再び起こり、同じ原因がいつの時代にも同様な結果をもたらすのである。

ここで皆さんに注意を喚起しておかなければならないが、なかには数年前、愛国心を装いながら、神聖なる自由のみを口に出し、先の御代には、我が国の政府を機能させ、そのバネと車輪を自然に活動させ、その機能を実現するために必要不可欠な当然の権利を国王に与えず、口先だけで自由を唱えていた人たちがいる。これらの方々は国王の正規の近衛兵を認める寛容さも示さなかったのに、今では厚かましくも平時に二万人の軍隊を維持すべきだと説いている。この忌まわしい変節に対する忌むべき言い訳として、もしこの控えめな宮廷の要求を認めなければ、この件や、他の要求を受け入れる他の党派が厚くもてなされることになり、事態はさらに悪化するといっているのである。自分たちが支持している恣意的な政府は、他の人々が支持していたものとは別物だというようである。また、専制政治の特徴と特色も自分たちがその従者となれば優雅で好ましいものかのようである。しかし真実から目をそらしてはいけない。というのはもし彼らが宮廷をこのようにしたいと考えるなら、以前から恣意的な権力のお気に入り、彼らが恐れている党派におだてられていることにすぐに気づくだろう。そして彼らの行動原理は実際の行動も同じだが、あらゆる法的権利の敵であり、母国の正当な市民的自由の敵であることがわかる。それゆえにこれらの浅ましい不器用な連中は専制政治の材料の寄せ集めに利用されるだけで、この建造物を完成するためにより熟練した建築家に地位を明け渡さざるをえない。

そしてモーセ<sup>9</sup>がイスラエルの民を捕囚から救い出したのと同様に我々を救い出した君主の治世の間は我々はこの種の企みから免れて安全である。だが、ある君主の生命がヨーロッパの維持に極めて必要不可欠なので、プロテスタントやカトリックの君主が昔の格言を忘れ、本質的な敵意を放棄して、彼を自分たちの後援者、擁護者とすることを共通の利益とした。この君主は他の君主にとって美德として賞賛されるもの、つまり敵に対する過度の寛大さとか、我々の安全ばかりでなく、全ヨーロッパの自由と世界におけるプロテスタント信仰が左右される彼の生命をあまりにも危険にさらしている以外なんの欠点も見いだせない。この極めて優れた君主が（その偉大で栄光ある行為と同様に）不滅であるならば、我々は共通の思慮分別を働かせ、すべての自衛本能を放棄し、彼の保護と指導に頼るべきであろう。しかし、いかなる高德の人物も、栄光を極めた人物も自然への共通の債務を免れるわけにはいかない。すなわち死は最も高貴な生命をも絶つ大鎌を持っている。従って我々は彼にいかなる権力も委ねるべきではなく、また、彼の後継者に引き継がせるべきものでもない。そして疑いなく、我々の偉大な擁護者はこのことや、彼の不屈の勇氣と行動によってこれまで進められてきた救済を完遂するための無理からぬ要求に関して、残念に思うことはないだろう。というのは、モーセのように、越えがたい障害とともに、約束の土地の見える場所に我々を向かわせることが人類の最大の不幸である。そして我々の事情もそのようなものだと私はいつも理解している。すなわち、常備軍を維持することで我々の内部をむしばみ、その常備軍が邪悪な君主の手にあるならば（そのような不幸に我々はしばしば見舞われているが）我々の政体を必ず崩壊させることになる。そしてこれは極めて明白で重要な事実であり、いかなる立法者も、この国家が確実に難波してしまう岩礁のようなこの巨大な渦巻き<sup>10</sup>を避けて、自由な政府を樹立したことはない。イスラエル人、アテネ人、コリント人<sup>11</sup>、アカイア人、ラケダイモン人<sup>12</sup>、テーベ人<sup>13</sup>、サムニウム人<sup>14</sup>、そしてローマ人など、自由を保持している国家はすべて自分たちの都市の内部で給料を支払って軍隊を維持したり、国民に戦争を職業とさせたりしてはいない。軍事力と統治権は常に手を携えて増大することがよく知られており、それ故に自分たちの市民を訓練し、常に自分たちの領土の軍備を整え、国全体がこの方法により市民軍を作り上げたのである。国民の大部分が武器を携え行使することが彼らの自由の唯一の防壁となる。これは国民が国内においても、また国外においても自分たちを守る最も確実な方法と見なされている。国民はこの方法により、国内の市民による敵対行為や野心的で凶暴な外国の侵略に対して安全に守られる。国民の武器はいまだかつて国家の平和を保持することに関心のない人々の手に渡ったことはない。国民は信仰と祖国のため戦い、外国勢力を撃退し、自

由を守り、自分たちの仕事に戻れることで十分な報酬だと思ふのである<sup>15</sup>。当時は市民、兵士、および農民との間に区別はなかった。というのは国民の安全に必要な場合には誰彼となく皆が武器を執り、戦いが終わった後はすばやく武器をおさめたのである。それゆえにローマ人で最も優秀で勇敢な将軍は農民出身であり、任務を遂行した後は満足して帰還し、指揮権を返還し、普通の市民に復するまでは決して凱旋式を要求しなかった。この有名な国家は帝国が膨張し、国外において属州の維持や獲得のために有給の常備軍の創設が必要になるまで、他人の手に武器を委ねることを認めたことはなかった。その後、贅沢が領内に蔓延し、そのうちに自由の厳格な規則と規律がゆるみ、軍隊を国内に駐屯させたが、そのような事態は非常に危険な結果をもたらすことがわかり、国民は適切な距離において軍隊を駐屯させる法律を制定せざるをえなくなった。すなわち、いかなる将軍といえどもルビコン川を渡れば国家の敵と宣言されるのである。そして、この河にかかる橋に以下の碑が刻まれていた。「将軍であれ兵士であれ、また武装した支配者であれ誰であれ、止まりなさい、軍旗と武器を下におきなさい、川を渡ってはいけません。」<sup>16</sup>この碑文は、シーザーがあえてこの川を渡ろうとしたとき、大帝国の完全制圧の断行を決断させただけである。

また、すでに述べたように、いかなる国家も自由を失うという法則から免れることはできなかった。そしてこの種の例は無限にある。その中から、時代ごとに、少しばかりの例をあげよう。それはよく知られており、だれもが読んだことのあるものである。

最初の例はペシストラトス<sup>17</sup>であり、彼は自分の護衛のために五十名の衛兵をアテネ市民を巧みに説得して認めさせ、その衛兵を増員し、城と政府を掌握し、国家を滅亡させ、アテネの専制君主となった。

コリント人は外敵を恐れ、自分たちの都市防衛用として四百名の守備隊を維持する法律を作り、ティモファネス<sup>18</sup>に指揮権を与えた。彼はその政府を転覆し、指導者層を皆殺しにし、自らコリント王と僭称した。

シラクーザ人<sup>19</sup>アガトクレス<sup>20</sup>は軍総司令官であったが軍隊に影響力を強め、元老員議員全員と富裕市民を殺害し、国王となった。

ローマ人は巨大な洪水のように押し寄せて、帝国をおびやかしていたチュートン人やキンブリー人を恐れ、マリウス<sup>21</sup>を軍司令官に選び、国家の決まりに反し、彼を五年間その地位にとどめた。その間、マリウスは軍隊内部に勢力を浸透させる機会を得て、ローマの自由を圧迫した。彼とスラ<sup>22</sup>のもとでローマが被ったすべての災い、虐殺、破滅はこのことに起因する。彼らはローマ市街をエリート階級の血で満たし、町全体を貴族、紳士、市

民の修羅場とした。

同様な事情が、シーザーにあの有名な共和国を完全に転覆させる結果となった。というのはガリア総督職の延長によりシーザーに配下の軍隊を私物化する機会を与え、彼はうわべは不本意を装いながらも進軍し、元老員議員を追放し、国庫を管理し、敵対者と戦い、終身独裁官となった。

オリバロット・デイ・フェルモ<sup>23</sup>は仲間の百騎をともない町に入る許可を同郷の市民に求め、これが認められると、すべての主導的市民を虐殺し、自ら君主と宣言した。

フランシス・スフォルツァ<sup>24</sup>はミラノの傭兵隊長であったが、権力を不当に奪い、ミラノ公<sup>25</sup>となった。

デンマーク王クリスティアエルン二世<sup>26</sup>がスウェーデンを征服した後、豪華を極めた宴会に元老員議員と貴族全員を招き、二日間彼らを大いにもてなした後、極めて残酷に彼らを虐殺した<sup>27</sup>。そのとき囚人であった勇敢なグスタブス・エリクソン<sup>28</sup>以外は誰もこの大虐殺を免れなかった。しかし彼は後に幾多の艱苦を乗り越えて脱出し、幸運と勇気と彼の指揮のもと、スウェーデンからデンマーク人を追い払い、以前のスウェーデン王国を復活させた。当時は彼らの寛大な解放者に対して過分な物は何もないと思われ、皆が彼を賞賛し、国民全体の希望で彼は国王に選ばれた。さらに自分たちの感謝の気持ちのこの上ない証とするために彼に軍隊を任せた。しかし、彼らはすぐに自分たちの誤りに気づいた。というのは自由を失ったからである。そしてその「唯一絶対の権力」<sup>29</sup>を認めたあとでは、他の問題で異議を差し挟んでも遅すぎた。彼の後継者らは他のすべて権限を取り上げ、今ではその国民は自分たちの馬鹿正直な寛容さがもたらした悲惨な例となっている。

デンマークの物語はあまねく世に知れ渡っており、これまでの優れた作家により記されているので、私と同じことを繰り返すのは差し出がましいことかも知れない。したがって以下のことのみ述べておきたい、すなわち、もし、国王が自由に使える軍隊を保持していなければ、貴族は自分たちの国家を引き渡すことなど決してしなかったであろう。

我らの同国人、オリバー・クロムウェル<sup>30</sup>は自らが仕えていた議会を解散し、偉大な業績により世間から不朽の名声を得た。そしてこれを彼は軍隊の支援を得て成し遂げた。この軍隊が多くの高徳で、謹厳で、公共心に富む人々で構成されていたということは、それ以後、同様な性質の人々の間で広く知られていた。

最後の例として、西インド諸島のフランス植民地のことであるが、近隣のインディアンと戦争になり、行軍中に非常に暑さに疲れはて、奴隷に自分たちの武器を運ばせた。奴隷はこの機会をとらえて彼らを襲撃し、皆殺しにした。彼らの愚かさに対する正当な罰であ



る。そしてこれは例外なく、自分たちの武器を手放すものの運命であろう。というのは、人が主人になれるときに召使いに留まると考えるのは馬鹿げた妄想である。そしてハリントン氏<sup>31</sup>が賢明にも述べているように、自分たちの武器を召使いに運ばせるような国では、召使いが彼らに木皿を持たせることになるだろう。

大軍隊を持ちながらも、自由を失っていないベニスやオランダは私の主張の反証例だと反論する人もあるだろう。そのような問いには次のように答えよう。両国はベニス市内とか、オランダ連邦共和国諸都市の政庁所在地には常備軍を置かず、市民だけで守り、傭兵を占領した国々、すなわちベニスはギリシヤやイタリア本土に、オランダはブラバント<sup>32</sup>やフランダース<sup>33</sup>などに駐屯させている。そしてこれらの国家は、軍隊をそのように配置して、自分たちに危険が及ばないようにしている。というのはベニスは艦隊がなければ攻撃できないし、オランダは自分たちの軍隊に征服されたことはない。オランダには強大な都市が多く、人工と自然により要塞化され、市民によって防御されており、自国の軍隊が彼らを侵略しようとするのは実りのない試みとなろう。というのは、もし軍隊が都市を攻撃しようものなら、門を閉ざすだけで軍隊のもくろみは挫折するであろう。

しかし、もし共和国において軍隊と自由が共存できるとしても、自由君主国では話は別である。というのは、前者においては、将軍や士官を指名し、任命し、追放し、罰することはすべて国民が適切と思うままであった。そして自由を奪おうとするいかなる試みも確実に死刑を意味した。一方、後者においては国王は常に軍司令官であり、いかようにも軍隊を利用できる。そして国王に反対することは大逆罪となる。

君主の中にはメディチ家<sup>34</sup>や、ルイ十一世<sup>35</sup>とか、その他にも専制政治の基礎を軍隊の直接の援助を受けずに固めたものもいる。しかし彼らは皆独裁を確立するためには軍隊が必要だと理解した。もしそうでなければ、国民が自分たちの状況の変化を少しでも経験すれば、彼らが一年かけて不当に得た権力を一日のうちに嫌々ながらも放棄させるであろう。

この件はわざわざ証明することは恥とも思えるほど明白である。というのは世界を見渡せば、自由と軍隊が両立している国のないことがわかる。故に、国民が自由であるか、奴隷であるかは彼らが軍隊を常時、維持しているかどうかを尋ねるだけで十分である。そしてこの手始めとなる質問の答えが疑問を解消する。中国、インド、タタール、ペルシヤ、エチオピア、トルコ、モロッコ、モスクワ大公国、オーストリア、フランス、ポルトガル、デンマーク、スウェーデン、トスカナ大公国<sup>36</sup>、そしてドイツやイタリアの小公国などにおいては、国民は哀れな奴隷として暮らしている。そして、政庁所在地に軍隊を駐留

させていないポーランド、ビスカヤ<sup>37</sup> スイス、グリゾン<sup>38</sup> ベニス、オランダ、ジェノア<sup>39</sup> ジュネーブ、ラゲーザ<sup>40</sup> アルジェリア、チェニス、ハンブルグ、リューベック、ドイツのすべての自由都市、そして先の治世以前のイングランド、スコットランドのような国々の国民は自由である。これはきわめて自明な事実であり、厚顔無恥の常備軍唱道者もあからさまには否定せず、次のように我々に語る。すなわち一万五千とか二万を越えない軍隊はこのように人口の多い国ではほんの少数に過ぎないと言うのである。それに対して私は、その数は数百万の軍隊と同様に確実に我々を破滅させると考える。その理由を述べよう。時として統治者の野望に対して武器をとって自らを守る必要に駆られ、自分たちの財産を守るために戦わなければならないことはすべての国における不幸である。というのはもし君主が鉄の鞭で我々を統治し、我々の法律と自由を無視し、また我々の不満、嘆願、涙に関心を払わなければ、我々が頼るべき権力は地上には存在しない。それ故に、我々は運命に耐えて従うか、もしくは自衛のために決起する以外に方法はない。もし決起する能力があれば、我々は決してそのような事態には陥らないだろうし、我々の剣は手中で錆び付いてしまうだろう。というのは、戦争をする能力がある国家は平和に暮らせる最も安全な国である。そして剣を携える人はそれを使う機会ほとんど無いはずである。さて、私は言いたい。もし国王が二万人の軍隊を持っていたら、またはその半数以下でも軍隊を持っていたら、国民は外国勢力の援助なしでは自分たちの自由は守れない。外国勢力の援助を請うことは病気と同様な最悪の治療方法である。そしてもし我々に法律を守る力が無ければ、無政府となる。

というのはイングランドは小さな国であり、強大な都市は少なく、それらの都市は国王の手中にあり、貴族は土地保有権の崩壊で武装解除され、市民軍は国王の命令による以外は招集されないで、イングランドのいかなる土地において招集された軍隊も、少数の部隊だけで初期段階で撃破される。三、四千の無防備で非武装の人間が同数の傭兵に対して何の意味があろうか。もし彼らが戦場に出撃するとして、彼らを自分たちの代表として選ばなければならないとすれば、どちらを選ぶか。もし、彼らが議会は扇動的で党派の集合体であり、それゆえに廃止すべきであると主張するならば、あなたの自由はどうなるのか。またはもし彼らが議회를包囲し、統治権を明け渡さねば剣にかけると脅せば昔からのイングランドの政体はどうなるのか。これらの事象は世界のいくつかの地域で実際に起こり、また起こる可能性がある。今日トルコの専制の原因となったのは何か。召使いが武装したからではないか。ローマの栄光ある共和国を維持したものは何か。市民が剣を持っていたからではないか。

そして、これに加えて、王権の並はずれた特権や、国王が持つ莫大な収益や、王室、国税、国家、法律、宗教などの利益をもたらす極めて多くの役職や、恣意的な権力の不変で忠実な友である強力な党派の助力とともに、海軍のことを考えてみよう。その党派と現国王との唯一の争いは我々をきつく縛り付けたと思う鎖と足かせを切り落としたことのみであり、かつては我々同士を不幸な争いに巻き込んだ党派である。(その結末は話したくない) それ以来、彼らが用意した捕囚を避けるために、莫大な血と富の犠牲を払い、うんざりする耐え難い負担のかかる戦いに巻き込んだのである。さて、もし誰かがこの点について考えてみれば、我々に対して軍隊が投入されなくても、我々は宮廷の権力に対して自らを守るために十分態勢を整えるべきだと確信するであろう。そして我々は一度ならず、これが真実であることをあまりにも破滅的な経験を経て見出した。というのは先の治世を振り返るなら、我々はこの国が破滅の際に追い込まれ、自由の最後の息を引き取る間際まで追いつめられながら、それでも致命的な打撃を受けなかったのは我々の努力の結果というよりは運が良かっただけということがわかるだろう。

そして誰も否定するとは思わないが、もしチャールズ一世<sup>41</sup>があらかじめ五千人の軍隊を持っていたら、国民は自由のために一撃を加えることはできなかったであろう。またはもしジェームズ二世<sup>42</sup>がカトリック教の導入を考えず、ただ恣意的な権力に満足していたら、彼とその護衛兵はすでに我々の手足を束縛していただろう。しかし、敵意を持って企まれた圧政が彼ら自身の戸口を訪れたなら、彼らはすばやく、自分たちが都合良く考えていることと、他人を苦しめることとはどれだけ事情が異なるかを世界に示したことであろう。そしてこのようにして我々は自分たちを救ったのである。そして先の国王は貴族、ジェントリ、僧侶、民衆、そして彼自身の軍隊が彼に刃向かい、そして我々の側には擁護者として国王の血筋に近く、賢明で、勇気があり、強大な国家の後援を得た君主がいたが、それでもなお我々はこの革命を奇跡に近いものと見なしている。

ここで付け加えたいが、これまでに私が例としてあげたほとんどの国は少数の軍隊で奴隷化された。オリバー・クロムウェルは一万七千人の軍隊しか残さなかったし、モンマス公<sup>43</sup>は人民のあこがれの的であったが、二千人の軍隊に鎮圧されたと言われている。いや、シーザーはローマ自体を五千人の軍隊で占領した。そしてファルサロスの戦いで<sup>44</sup>、二万二千人の軍隊で世界の運命が決まった。そしてこれ以後、ローマ帝国とオットーマン帝国のほとんどの革命は近衛兵の一団や近衛騎兵によって引き起こされた。前者は決して八千人を越えることはなく、後者は一万二千人を越えることはなかった。そしてもしこのような巨大帝国において、たいして多くない人数でこれほどまでの混乱を引き起こすこと

ができるとすれば、二倍の人数の軍隊は我々に対してどのようなことができようか。そして彼らが軍隊を持ちたいと主張するときに彼ら自身が告白している。すなわち、我が国が一万から一万五千のフランス軍の奇襲を受ければ、彼らに対抗する常備軍がなければ、王国はフランス軍に蹂躪されるだろうと。さて、もし貴族、ジェントリ、そして庶民とが連合した少数の市民軍が国王に対抗できるならば、国王の権威に支持され、それに必ず伴う利益があるとき、公共の福祉のために行動する時をのぞいて、同数の軍隊は国民に対していかなる行動をとるだろうか。

しかし我々はこの軍隊は我が国の恒久的制度としてではなく、ヨーロッパの状況が軍隊を持たずに済むように改善されるまでの一時的なものだと教えられる。しかし、私はこれらの紳士方がそのような時期はいつ来ると思っているか知りたい。ジェイムズ二世の生存中なのか、それとも彼の死後なのか。現在、年齢と不運に埋没しつつある惨めな男からの恐怖よりも、若くて力に満ちた僭称皇太子からの脅威の方が少ないというのか。それともフランスはこの戦争で被った戦禍を回復するために一息ついた後よりも、このうんざりする苦しい戦争の直後のほうが、我が国を攻撃する能力がより大きいと言うのか。いや、ちがう。我々は今ほど安全に軍隊を解散できる時期は決してあり得ない。そして国家に対する陰謀者にはよく知られていることであるが、今、軍隊を維持することは永遠に軍隊を常設することだと彼らは確信している。というのはヨーロッパが現状のままであれば、世論は軍隊を維持すべきだとなるであろう。もしヨーロッパの状況がフランスに有利に展開するならば、その根拠はより強大になり、軍隊を増強すべきだと告げられよう。しかしもし世界情勢が変化して、もはや我が国がフランスを恐れる必要が無くなったとしても、我々の支持がなくても軍隊は維持されることになるだろう。いや、軍隊が引き起こす、まさにその不満自体が軍隊を維持し続ける主張となろう。しかし、もし軍隊が国民を抑圧せずに維持されるなら、すぐに彼らは見慣れた存在となり、我が政体の一部のように見なされるだろう。そして次第に我々は軍隊が危険でないばかりか、必要だと思わされるようになる。というのは誰もが目にしたとしても、その本質を理解できるものは少数だからである。そしてそのような少数の人々は、数年間平穏に共存してきた軍隊が危険だなどと大多数の人々を説得することは不可能だからである。とくに軍隊を解散するほうが（彼らが信じ込まされているように）市民軍を維持するよりも自分たちの懐により多くの負担がかかるときには。そしてこの件については我々には不幸な経験がある。というのはチャールズ二世が少数の兵隊を維持することを黙認されて、（それはイングランド国王にとって儀仗衛士や、護衛兵以外の初めてのものであったが）その数を目立たないように増やし、彼の後継者に

莫大な数の軍隊を残し、もはや自分が宣誓した法律には束縛されないと議会に通告させる事態を招いた。すなわち、これらの軍隊の庇護のもと、彼は軍隊を招集した。そしてもし、事情の複雑さから（このようなことは二度と生じることはないであろう）オレンジ公が自身と国家の権利を擁護するという事態で現れなかったならば、わが政府に終焉をもたらしたであろう。そして我々はいく先頃この危険を免れたのであるが、それでも習慣により軍隊に慣れ親しんでいるので、自由を切望していると主張している人々のなかには軍隊を招集することは当時の法律に違反していたことは考えず、また、現在の政府は先の政府の破壊のもとに設立されたことも考えず、現国王に先の国王と同数の軍隊の維持を認めないことは厳しすぎると言うのである。また神の王国が不正を基礎にしては設立されないと同様に、この政府は同じ瓦礫の上には設立できないということにも考えが及んでいない。

しかし我々は自分たちの手に財布の力を維持している限り、奴隷になる心配は無用であると陰謀者は言う。それはまさに真実である。しかし彼らは、国王が金を集める権力を持ち、誰も国王に異議を唱えることはできない、ということは我々には語らない。

正義を拒否する者は武器を持つ者に全てを与えるのだ。<sup>45</sup>

というのは軍隊が金を集め、その金で軍隊が集められる。しかし、もしこの手順があまりにも絶望的であるならば、少数の分割払い仲買人の意にそむき、大蔵省を閉鎖するだけのことだ。（彼らは五割引の値段で年金証書を購入した）そうすれば年間三百万ポンドの収入削減が見込まれ、彼らの減収になる。そしてこのような方法の実践可能性を疑うものはチャールズ二世の治世を振り返ってみよ。そうすれば大蔵省の役人はこの治世で自分たちの報酬に関してうぬぼれる理由はあまりないと思う。少なくとも年金証書購入者はそう思っている。そしてもし彼らが大臣の公正さからよりも、国王の人徳からより大きな保証が得られなければ不合理な疑念を抱く傾向がある。しかし、（他国の運命がどうであれ）もし廷臣の考えが公共の福祉以外の何ものでもないと仮定できるとしても、日常の祈りの義務としている避けるべき誘惑に導いて、そのような奇妙な美德に運を任せるべきではない。しかし、残念ながら、我々は奇跡の時代に生きているのでもなく、とりわけそのような種類のものではない。我々のヒーローは粗雑な要素で構成されており、そのような立派な原則には汚れすぎた政体と混じり合っている。というのは世の中での少しばかりの経験で気づいたのであるが、たいていの人間は権力にとまなう多くの悲惨さを経験する。そし

てそれ故に私は子供や、凶人などに対処するのと同じ方法に賛成である。すなわち、彼ら自身やまたは他人に危害を与えるような武器はすべて取り上げるべきである。そしてボツカリーニ<sup>46</sup>の羊がアポロに対して、将来オオカミに牙を持たせないように望んだのは分別ある要望だと私は考える。

他のすべての主張が通らなかつたとき、彼らは昔の専制君主の論理的理由に助力を求めらる。すなわち、フランスの国力は強大であるので軍隊についての議論の結論はさておき、軍事力なしでは我が国は存立できない。そしてもし我々が奴隷にならざるを得なければ、カトリックの君主の奴隷よりはプロテスタントの君主の奴隷となりたい、そしてカトリックの国王の最悪のものはFの国王であると。さて、私はジョンソン氏<sup>47</sup>の意見に賛成である。プロテスタントもカトリックも同様であるから、専制に異名をつけるのは偽の家紋をつけることである。そしてもし私が奴隷とならざるを得なければ、私にとっては主人が誰となるかは大した問題ではない。またそれ故に私は軍隊に支配されることに絶対に賛成できない。それはもっとも残忍な征服者が我々に課する最悪なものである。しかしそのような事態は、我々が海を十分防衛している限り恐れる理由はほとんどない。

イングランドほど海軍力に有利な地勢にある国は他にない。海は我が国の本来の活動領域であり、我が国の船員はきわめて勇敢であり、我が国の船舶は数多く、世界で比類無き良質の材料で建造されている。そのような軍隊を適切にかつ有効に使用すれば世界を支配できる。そしてもし我々が平和時に有能な部隊を十分に武装して維持しておけば、海軍力で我が国を凌駕しない限り我が国を侵略しようという考えを君主が抱くことは事実上もつとも馬鹿げたことである。というのはそのような企てに必要な準備は全ヨーロッパを警戒させ、我が国と同盟国に武装する時間を与え、防衛態勢を取らせることになる。そしてオレンジ公<sup>48</sup>が六百隻の船で一万四千人だけの軍隊を運んできたこと、強大なアルマダ（当時は世界の脅威であった）が一万八千人だけを載せたことを考えれば、奇襲は行えず、我々は全艦隊の出動準備をする時間が稼げ、オランダやアイルランドから軍隊を引き連れて、必要であれば市民軍も出動態勢を整えられることが確信できるだろう。特に、平時にはフランスの港をすべて自由に使用でき、あらゆる港から情報を得ることができよう。

しかし彼らは我々に敵に都合のよい、我々を港に釘付けにするような風が吹くかもしれないという。それはフランスとイングランドの位置関係から、私に言わせればほとんど不可能である。というのはもし我々の艦隊がファルマス<sup>49</sup>やランズエンド<sup>50</sup>に位置していたらブレスト<sup>51</sup>からとか、大洋からの艦隊は奇跡が起こらない限り我が艦隊から逃れることはできない。そして海峡ぞいの港から我が国を侵略しようとするもくろみは（安全に碇を

おろし停泊している) 少数の船でそれを防ぐことができよう。また、用心深い君主はどのような危険な風向きの不確実性に莫大な犠牲を払おうとは考えないであろう。また、退却が完全に遮断され、もくろみの一部が失敗したときには先に国民の三分の一を犠牲にし、多くの大国や強大な都市をそれまでの勝利で築き上げたすべての榮譽とともに犠牲にしたような避けるべき戦争をまた新たに引き起こす国へ軍隊を派遣するようなことはしないだろう。

そしてここで我が海軍(それは我が国の有名な戦力であるが)の過去八年間の誤用が、私に対する多くの反論と同様に最大のものであることを認めなければならない。その種の間違いがすべて偶然とか無知の結果であると思うほど私は無知ではないが、このことが以前私が理解できなかった謎を解く。また、フランス艦隊を壊滅させる多くの機会を失ったことが特別な理解できない原因でもなく、敵のたゆまない試みや、浅ましい何某の軽蔑すべき策略にもかかわらず、この艦隊は完全に我が国を防衛したので、敵はこの八年間の戦争において我が国を侵略する機会を一度もつかむことができなかった。

我が艦隊の士官たちが腐敗していると反論されるかもしれない。または一度に艦隊を壊滅させてしまう嵐が起こるかもしれない。そしてそれゆえに我々は弓に二本の弦を用意すべきである。これらを考えてみると、彼らが感じている脅威はすべて偏っていると思われる。そして彼らは遠く離れたフランスによる破滅の可能性をそぐために、自国において不可避の破滅に我々を陥らせることは気かけない。しかしこの幻想もよく訓練された市民軍によって鎮められ、すべての恐怖の種は消え失せよう。この言葉が消え失せるやいなや私に対して向けられる小さな銃弾がある。軍務についたとき戦闘を夢にさえ見たこともない不慣れた大衆に、野営の厳しさに耐えるように鍛えられてもおらず、敵と遭遇したこともないような連中に我々の安全をどうして委ねなければならないのか。そう言って彼らは傭兵を増大させる。あたかもイングランド軍に内面的な美徳があり、また鶏小屋から盗みを働くような浮浪児が二回の戦闘で英雄に鍛え上げられるとでもいうかのように。宮廷が執拗にこの軍隊の活力をそごうとする行為は彼らの反対をある程度正当化することは事実である。というのはこの忌み嫌うべき先の御代の政策は全力をあげて国民の武装を解除し、市民軍を無力化し、カトリック教と奴隷制を導入するために常備軍を設立するためであった。そして市民軍の実戦力を高める方法が提案されたとしても宮廷はそのような審議は決してさせないであろう。そして他の士官より熱心に自分の部隊を訓練する士官は反乱の陰謀を画策したかのように非難される。さて、この御代における尊敬すべき愛国者は先代の国賊的怠慢と非常に評判の悪い政策を利用している。しかしなぜ市民軍の実戦力を高

めてはいけないのか。なぜ貴族、ジェントリ、そしてイングランドの自由土地保有者は、自分たちの生命、財産、自由を守るため、衛兵や警備兵にではなく、自分たちに任務が委ねられないのか。そしてなぜ征服者から支給される一日につき六ペンスというごくわずかの金額しか忠誠心を計る基準もなく、何も失うものもない傭兵と同様な力と勇気で自分たちを守らないと言えようか。

石弓の射撃についての法律を火縄銃に変えるとか、休日だけでも各教区で若者を訓練するための人数を維持してはどうか。そして彼らの競争心を鼓舞するために、優秀なものに褒美を与えてはどうか。

イングランドの全市民軍を六万人に減少し、その三分の一を交代で常に訓練してはどうか。

男子は主人から解放されるまでは、軍隊において隊長から除隊命令が出るまでのように、市民軍として兵籍に入れることはできないか。そして馬が死ぬか役に立たなくなるまで、同じ馬が派遣されてはいけないのか。

軍隊が解散し兵卒が王国の幾多の地方へ分散したとき市民軍に編入できないか。そして軍隊の下級士官が彼らを指揮したらどうだろうか。

さて、同様なことは、実行可能だろう。そしていくつかは我々の植民地とかジャージイ諸島<sup>52</sup>やガーンジー島<sup>53</sup>やポーランド、スイス、グリゾンなどで実行できるだろう。これら諸国はイングランドよりもずっと重要さが低く、強大な隣国があり、防御となる海も艦隊もなく、ただ頼るべきものは市民軍以外にない。それでも誰も攻撃しようなどとは思わないだろう。そして我々は、先の戦争でみたようなサヴォイのヴォー人<sup>54</sup>やカタロニア<sup>55</sup>のスペインゲリラ兵やアイルランドの市民軍と歴史上同様に偉大な業績が以前、ロンドンの補助部隊によってなされたのを目にした。もし宮廷が心からこの計画の推進に協力すれば我が軍の勝利となる。また、もし国王が自らその先頭に立ち、賞賛に値する人々に恩賞と名誉を与えれば、我々は若い貴族やジェントリが武装して馬車も用意して荘厳な姿を見せ、軍事訓練において、お互いに競争に勝とうと惜しみなく対抗心を発揮するであろう。そして国家に役立ちたいという高貴な野心を抱くことになろう。古代においてはアカイア、テーベなどはギリシヤの最低の国家であったのだが、ペロピダス<sup>56</sup>、エパメイノンダス<sup>57</sup>やフィロペメンの<sup>58</sup>指導のもとに世界で最も訓練された軍隊と最も有能な兵士を持つようになった。

このような市民軍は常備軍であり、同様に危険であり、ずっと費用がかかると彼らは反論するだろう。私の答えは以下のごとくである。



イングランドの貴族や主要なジェントリが指揮官であれば軍隊に危険はない。そして軍隊の主力は自由土地保有者とその子息や召使である。貴族やジェントリが自分たちの地所、自由に対する権利を失わせるような異常な計画に参画すると考えない限り、危険はない。そして、彼らを派遣し、給与を支払う人々に敬意をいただき、任期が終わればまたそのような人々のもとに戻らなければならないとき、きわめて馬鹿げた考えを抱いたとしても、兵士は決して従わないだろう。というのはもし私がある人を派遣するときには、市民軍の士官が私に対して戦う人を選ぶように、私は必ず自分のために戦ってくれる人を選ぶ。そして今までの政府はこれが真実であることの証人である。彼らは市民軍を私が二度と目にしたくないほどに墮落させた。それでも市民軍を彼らの恣意的なもくろみに利用するために頼ることはなかった。モンマス公の侵攻において彼らの士官は反乱を恐れてモンマス公の軍隊の近くへは市民軍をあえて派遣しようとはしなかった。いや、長期議会<sup>59</sup>自体も宮廷が我々を破滅させる最後の一击を加えることを期待していたときに、宮廷に反対した。

彼らの反論の最後の部分、すなわち、この市民軍が軍隊より費用がかかるという点についてお答えしよう。すなわち、(私が思うに) 誰も市民軍を完全に廃止しようとは提案しないので、もし我々が市民軍の通常のコストに加えて二万人の軍隊を維持するために巨額な費用を追加支出するというならばその金額は市民軍の実戦力を高めるには十分過ぎる額である。しかし、もしこの反論が真実であるとしても、我々の法律と自由を守ることと優劣を争う問題にすべきではない。というのは万一必要というのであれば、すべてを取り上げられるよりは私の財産の三分の一を差し出す方がましだからである。

そして市民軍は一定の規律のもとで維持されている軍隊ほど実戦力がないことは認めなければならないとしても、すでに述べたように、これらの人々は六万の市民軍を訓練すれば二万の常備軍と同様な能力があると主張するであろう。しかし、これは疑問である。というのは常備軍を維持しながら、同時に市民軍の実戦力を高めることは不可能だからである。彼らはブロード金貨と削り取った硬貨とに互換性が無いように、同時には運用できない。それ故に宮廷は全面的に市民軍に頼るか、もしくはまったく頼らないかのどちらかを選択しなければならない。ところで、このような事情は市民軍が訓練されるまでは軍隊を維持しなければならないという反論を沈黙させるかもしれない。というのは宮廷が軍隊を維持している間は決して市民軍の強化は実施されないからである。そして同じ反対が今後七年後には起きるだろう。すなわち、小さな軍隊は我々には役に立たず、我が艦隊を顧みなくさせ、市民軍の訓練を妨げ、そして国内で我々を奴隷化するだけだろう。というの

はこの軍隊は侵略から我々を守るには少数過ぎ、国民が抵抗するには多過ぎるからである。

この件に関して私の正当性を裏付ける発言を世界で偉大な人物がしているという権威のもと、より強い確信を持って言う。マキャベリ<sup>60</sup>は以下のことを証明するために数章を割いている。すなわち、いかなる君主や国家も臣下を戦争の専門家にしてはならない。またいかなる国家も安定した市民軍以外の軍隊では安全は確保できない。ベーコン卿<sup>61</sup>はいくつかの箇所で常備軍に反対する意見を表明している。そして彼は特に、傭兵は国家侵略に最適であり、市民軍は国家防衛に最適であると語っている。なぜなら、前者は手に入れるべき財産があり、後者は守るべき財産がある。ハリントン氏は訓練された市民軍で自分の全オシアナ<sup>62</sup>を築いた。そして最近読んだフランスの書物、『フランス政治史』によると、その中には「もしイングランドを破滅させれば、軍隊を保持させれば十分である」<sup>63</sup>と記してある。いや、今まで軍隊を嫌う考えを表明せずに自由政府について述べた人はいないと思う。というのは（ベーコン卿が述べているように）誰でも軍隊を使用するものは、しばらくは翼を広げることもあろうが、すぐに羽を落とすであろう。そして恣意的な目的のために彼らを育て上げるであろう。しかし、ボッカリーニの西インドの犬のようにすぐに彼らは必ず羊を噛むようになるであろう。

おそらく世界の砲術はこれら何冊かの書物が書かれて以後、変化し、戦争はより専門的の技能になり、それゆえに立派な兵士を育て上げるにはより多くの経験が必要となった。しかし、この技術はどこに存在するのか。部隊を訓練することにあるのではなく、また、数語の命令に従うことでもなく、これらはきわめて飲み込みの悪い頭の持ち主にも数週間理解できるものだ。いや、現代の訓練は古代よりもずっと短期間で、容易である。しかし戦争の非常な発達には規律正しい野営、防備、砲術、熟練した土木工事などにおいて目覚ましい発達を見せている。これらは多くの労力と経験がなければ習得できない技術であり、そして私室においてと同様に戦場においても同じくらい多く得られる。そして誰も常備軍を維持することが優秀な技師を育成するために必要だとは言わないと思う。

戦争での実体験は、それ自体は常備軍にとっても市民軍にとっても本質的なものではない。しかし前者は実体験なしでも、そして後者は作戦行動の機会があればそれに応じて獲得するであろう。現在、軍隊は長い戦争で訓練され、莫大な知識を習得しているのは事実である。しかしこれらの人々は除隊したときでも消え去るわけでもないし、まだイングランドに残っている。そしてもし議会が、彼らが祖国に対して果たした軍役に対して適切な恩賞を与えれば彼らは求められればいつでも、再び武器をとる用意がある。

しかし、これら愛国者たちに聞きたいのだが、以前の征服者以来、今まで不要であった軍隊が、今、なぜ我が国の維持のために必要というのか。ヨーク家やランカスター家の戦いにおいて優勢な党派が自らを援助するために常備軍を維持しようとしたことがあるだろうか。いや、彼らは自分たちの自由を犠牲にしない良識を持ち、また自分たちの国を奴隷化させない名誉心を持ち、自分たちの党派をより容易に運営した。スペインは現在のフランスほど強大でなく、強い軍隊を持たず、我々の敵でもなかったか。フランダースはフランスほど我が国の近くでないだろうか。そしてエリザベス女王<sup>64</sup>の時代のローマ教皇の関心は現在のジャコバイト<sup>65</sup>ほど強力でなかっただろうか。それでもあの極めて有能な女王は常備軍を持つなどとは夢にさえみなかった。ただ以下の話が十分に証明しているように彼女のもっとも確実な帝国は臣下の心の中で統治されるべきだと考えた。アランソン公<sup>66</sup>がイングランドを訪れ、しばらくこの町の豊かさや彼女の政府の運営や、彼女の宮廷の豪華さなどを賞賛したとき、それらの歓迎の最中に、彼女の衛兵はどこにいるかと尋ねた。その質問を彼女は数日後、彼を馬車でシティを案内したとき説明した。そのとき女王は国民を指し示しながら、(群衆は何度も歓喜の声で彼女を歓迎した)「これらが私の衛兵です、閣下」と彼女は言った。これらの人々には手も、心もあり、彼らの財布は常に私の命令に答える準備ができています。これらの人々こそ、スペインの強大な力、王位継承権争い、ローマ教皇の策謀、彼女自身のカトリック派の廷臣の度重なる陰謀などから四四年間の長期間、成功に満ちた治世をとおして彼女を守ってくれた本当の衛兵である。東西の軍隊とか、うわべを飾る軍隊しか持たないローマ帝国の皇帝たちには到底持ち得ない安全保障である。

この長くて破壊的な戦争の後のように、チャールズ二世とかジェームズ二世などの時代のフランスは彼らに対抗する同盟国が少なく、強大ではなかったのか。そして我々は当時、現在対峙しているよりもずっと少ない軍隊を想定していた。そのような事態はきわめて耐えられない苦痛の種であったので、チャールズ二世の治世において大陪審がそれを議会に提出し、そして長期議会はサー・ジョス・何某<sup>67</sup>を邪魔者と議決し、ロンドン塔<sup>68</sup>へ送った。彼が国王は自分自身を守るために衛兵を維持するのだと主張し、それらを解散させるべきだと演説したという理由であった。そして今、我が国の背教者は今までのイングランドで最悪の議会でさえも恐怖と混乱なしには考えつかないような行為で宮廷を変えるであろう。彼らはフランス国王は我が国の先の国王と同盟関係にあったので味方であると言い、彼が安全だと思い、現在と同様に彼の利益になると考えていたらそのときに同盟を破棄していただろうと主張する。しかし彼らによれば、我が国には彼と連合することに関し

て不満を持っている人物の方が多いとのことだ。それを私は否定しなければならない。というのはイングランドのいかなる時代の国王といえども現在よりもより多くの当然の影響力を有していたことはないからである。そして、多くの血と財産を消耗し、巨額で不公平な税金を支払い、何千艘もの船舶を失い、貨幣を改鋳することにより、一つの国家を根底から破壊して古代の混沌状態に陥れたかも知れないような衝撃を被り、多くの国々が不幸に沈み、救いを求めていたときに（病気の間が極めて親しい友人とよく言い争うように）、そのような高価についた戦争の間に彼が非常に強大で普遍的な影響力を持ち、彼が防衛に示した勇気と行為の果実を国民が収穫する平和時に、彼は疑いなくイングランドの玉座を占めた者の中で最愛の栄光ある君主となるであろう。

さらにもう一つ断言して、この主張を締めくくりたい、すなわちジェームズ二世を復活させるもっとも可能性のある方法は彼を閉め出すために常備軍を維持することである。

というのは、国王の安全は国民の敬愛の確固とした基礎に依存しているかぎりは極めて堅固であり、それは我々の法律と自由を崩壊させるはつきりとした目論見があることが天空の太陽のように明白になるまでは揺るぎないものである。しかし、もし我々が常備軍を保持すれば、すべてが不確実で当てにならない兵士の気分次第ということになり、それはいつの時代にも軍隊を持たない政府よりも多く、暴力的な突然の革命をもたらした。というのは彼らの間にとっても強い関連性があるので、もし二、三人の指揮官がそむいたり、またはジャコバイトの愛人たちと陰謀を企てれば、もしくはフランス王が再び家来を宮廷とか軍隊に入り込ませたり、今までより有利な取引を提供したりすれば、また繰り返しの革命が起こることになり、国民は自らの破滅の傍観者となるだけである。そして軍隊の構成を考えるものとかこれを疑うものは誰でも、ローマ帝国のことを振り返ってみなさい。そうすれば二六人の皇帝のうち十六人は自らの軍隊によって退位させられ、もしくは殺害されたことがわかるであろう。いや、世界の歴史の半分はこの種の例でできあがっている。しかし、我々は自国以外について述べる必要はない。我が国では平和時に二度軍隊を保持したことがあり、両方とも軍隊は我々の主人を打倒した。最初はクロムウェル指揮のもと、彼は何年間も議会のもとの戦いに勝利してきたのだが、その議会を追放した。その後はモンク公<sup>69</sup>が以前自らが設立した政府を打倒して、チャールズ二世を連れ戻した。そしてその後は軍隊が自分を再び追放することがないように解散した。その他の例は誰の記憶にも新しいことであるが、いかにしてジェームズ二世の軍隊が現在の正当で合法的な国王であるオレンジ公に加わったかということである。自分たちを幸運な兵士と呼ぶ墮落した不品行な原則しか持ち得ない人々にこれ以外何を期待できただろうか。彼らは殺人を職

業とし、報酬額以外のことは何も考えず、主義の正当性などについては何も問うこともない。自己弁護のためには嘘をつき、強欲で残忍である。依存すべき他の職業も生計を立てる方法もない彼らは君主の野心をかきたたせ、絶え間ない争いに没頭させ、自分たちの戦利品の分け前を得るのである。ある種の飢えた魚のようにそのような人々は嵐の中でもっともうまく暮らしていくのである。それ故に当然の帰結として彼らは、圧政から我々を救うためにイングランドに上陸し、敵対者の存在にもかかわらず勝利し、それを成し遂げた現国王の穏やかでありがたい施政よりは、先の国王の専制的な政府を喜ぶのである。

この論説において私はわざと小さな不都合については省略した。すなわちたびたび起こる争いとか、殺人、強盗、国内の鳥獣への多大の被害、公共施設、または折に触れ民家への駐屯、宿営の恣意的な配分による議会選挙への影響力行使など。多くの人間を労働の役に立たなくさせ、繁殖のみにさせ、彼らを勤勉な生活から怠惰な生活へと墮落させ、彼らをずっと大きな破滅に導く。そのうえ、士官の横柄さ、訪れるあらゆる町で行われる士官や兵士たちの放蕩行為。それは多くの女性を破滅させ、家族の屈辱となり、他人の悪い見本となる。そして数え上げればきりがないほど数多くの悪影響がある。これらは私が取り扱った我が政体の心臓の血に影響をおよぼすような事柄と比較すれば取るに足らない特殊な苦情の種であり、この種の主張において一部をあてるほど重要だとは思わなかったのである。さらに、彼らはしばしば自分たち自身の救済策を獲得する。奇跡を行い、生まれながらに目の見えない人にもものを見させ、理性のあらゆる有力な手段に対して揺るがない。というのは経験のみが愚者にとっては唯一の女主人だからである。賢明な人はカワカマスが歯を見せるときには噛みつくことに気づくであろう。そのことを愚者は理解せず、指を噛み取られて初めて気づくのである。

ここで私が常備軍反対の意見を述べたことは、専制の道具としての常備軍であり、国家の破滅の道具としての常備軍についてであり、それゆえにこの正当で必要な戦争での議会の同意に基づいて招集された我が国の常備軍に対しては弁明する必要はない。神に次ぐ我々の偉大で栄光ある救い主がその勇気と行為により我々の自由を守り、そして全ヨーロッパのプロテスタントの信仰を守った。というのはもし将来の治世において我々の法律に対して何らかの陰謀が企だてられたならば、これらのひどく恣意的な目的にあうような人々は追放され、他の人たちがとって代わるだろう。

また、私は我が軍隊がその勇気と忠誠心で祖国のために獲得した平和によって崩壊させられることは納得がいかない。議会がその寛容さと感謝の気持ちから彼らの仕事に匹敵する報酬を与えることを疑わない。その金額は外国人が支払いを受け、帰国したあとでは、

並はずれた額にはならないであろう。せいぜい、戦争がさらに六ヶ月続いた場合の金額であり、軍隊を維持する費用としては軽い負担であろう。しかし、もし我々自身の破滅に署名する以外に感謝の念を表す方法が無いと期待しておられる方があるなら、彼らの期待には添うことはできない。すなわち世界で最も強大な君主国を我々の法律を破ることによって打ち倒してしまい、我々が成し遂げた栄光ある政策を正当化するために我が国は八年間の戦争を四千万ポンドの出費と三十万人の犠牲を払って遂行し、それによって我々はヨーロッパ全体を守り、その結果、我々自身の自由を失ってしまったなどという馬鹿げた話を世間の人々が広めるような機会を与えるつもりはない。少なくとも我々がそれに賛成したなどとは言われぬように希望する。

終わり

#### あとがき

ダニエル・デフォー (Daniel Defoe) がモンマス公の反乱に参加してセッジムアの戦い (1685) で敗走し、逃避生活を送った後、1686年3月の大赦令を経て、名誉革命によりウィリアム三世がメアリと共同統治を始めて以来、*dissenter* であるデフォーにとって彼らの統治は決してゆるがせにできない政体であった。それを支持するデフォーは *Essay upon Project* (1697) などを発表し、様々な提言を積極的に行っていた。そのような時に世に出たものがウィリアム三世の常備軍に反対する共和主義者のこのパンフレットである。デフォーもすぐさま対抗して反対の論陣を張る。これは、その論争のきっかけとなったパンフレットの翻訳である。

#### 注

本稿は以下のパンフレットの翻訳である。

*An Argument, Shewing, that a Standing Army Is inconsistent with A Free Government, and absolutely destructive to the Constitution of the English Monarchy.* London; 1697.

本パンフレットの復刻版が名古屋大学図書館に所蔵されている。なお、第二版のマイクロフィルムは専修大学図書館にある。情報提供していただいた専修大学教授、島田孝右氏に謝意を表したい。

以下のアドレスにおいて原文の参照が可能である。

<http://www.potowmack.org/trench.html>

このアドレスに示されたものは、原文の句読点が現代風書き換えられており、かつ、原文の読み取りミスと思われる箇所もある。

本パンフレットは初版が1697年で、翌年第二版が出版され、さらに1703年に第三版が出されている。1697年の初版は印刷上、異種はないとされている。このパンフレット出版当時、イングランドはスコットランドとの連合（1707年）以前であるのでイングランドとした。

頁表記に関して、初版は「前書き」がローマ数字のvまでであり、本文は一頁三十四行で(1)頁から始まり(30)頁までであるが、第二版は頁表記が大きく異なり、「前書き」はローマ数字ivまでで、本文は一頁三十五行で(5)頁から始まり、(31)頁までである。また本文中の表現方法も少し異なる箇所がある。

- 1 原文は *Qui capit ille facit*. なおラテン語和訳に関しては京都大学大学院助教授、高谷修氏に貴重なご教示をいただいた。記して謝意を表したい。
- 2 David (?-c.970B.C.)。第2代イスラエル王 (c.B.C.1010-c.970B.C.)。
- 3 Aaron モーセの兄でヘブライ人の最初の大祭司。旧約聖書《出エジプト記》28、40:13-16参照。
- 4 Gilgal古代パレスチナ王国のいくつかの土地の名。特にイスラエル人がヨルダン川を渡った後に野営したエリコ付近の土地。旧約聖書《ヨシュア記》4:19-24参照。
- 5 旧約聖書《サムエル記》I.15:33参照。「あなたの剣が、女たちから子を奪ったように、女たちのうちであなたの母は、子を奪われる。」こうしてサムエルは、ギルガルの主の前で、アガグをずたずたに切った。
- 6 Gideonイスラエルの士師。ミデアン人 (the Midianites) の征服者。Jerubbaal ともいう。旧約聖書《士師記》6-8参照。
- 7 このパンフレットには著者の名前は記されていないが、共和主義者 John Trenchard (1662-1723) と Walter Moyle (1672-1721) の共著であるとされている。十七、八世紀においては著者名が作品に記されることは少なかった。
- 8 旧約聖書《創世記》6～8章によれば、最初の人類の墮落のゆえに下される大洪水の難からノア一家を逃がすために、神は箱舟の製作をノアに命じた。これを〈ノアの箱舟〉といい、方舟の字も当てる。平凡社、『世界大百科事典』。
- 9 Moses ヘブライ語ではモーシェ。ヘブライの指導者。イスラエル人のエジプト脱出を指揮し、カナンの地へ導いた。シナイにおいて神から「十戒」を含む律法を受けられた。旧約聖書《出エジプト記》2参照。
- 10 原文はCaribdis = Charybdis シチリア島の北東 Messina の海峡に発生する巨大な渦巻き。
- 11 Corinthians コリントス人とも言う。Corinth: コリント地峡に臨む古代ギリシアのドリス人の都市国家、海陸交通の要衝として繁栄。
- 12 Lacedaemonians ラケダイモン人=古代スパルタ人の別称。
- 13 Thebans Thebes: テーベまたはテーバイ、古代ギリシアのボイオティアの都市、アテネと

敵対した。アレキサンダー大王によって滅ぼされた。

14 Samnites Samniumサムニウム：イタリア中・南部にあった古代の部族国家、ローマとの3次にわたる戦争で滅亡（290B.C.）。

15 この文章を「彼らは金銭的報酬を受け取らず満足した」と文字通り解釈しては誤解を招くことになる。その解説として以下の文章が参考になる。

「最も早い時期には、兵士は兵役の代償として給料を受け取ることがなかった。民兵たるかれらは他人のための賃労働に従事したのではなく、外敵を撃退したり略奪戦争に出陣したりする武装国民そのものだったからである。」「かれらにとっての報酬は、外敵を撃退し、攻撃相手を屈服させることによるローマ国民全体の利益のほかに、戦利品についての--戦闘を指揮した将軍が分配する--分け前であった。」この場合の戦利品には、むろん敵兵士の武器だけでなく、敵国住民からの掠奪物も含まれる。ある意味で彼らは、戦利品の分け前のために、つまり掠奪のために戦ったのである。その限りにおいて彼らが掠奪を恥ずる必要はまったくない。むしろ、それを誇りとさえしたであろう。輝かしいローマの凱旋式に不可欠だったのは、数多くの戦利品つまり、「財宝、武具、捕虜であった」。『掠奪の法観念史 中・近世ヨーロッパの人・戦争・法』、山内進著、東京大学出版会、1993年、pp.29-30. 本書に関しては近畿大学語学教育部助教授、石井重光氏のご教示とご厚意により参照させていただいた。記して謝意を表したい。

16 原文は *Imperator sive miles, sive Tyannus armatus quisquis sistito, vexillumq; armaq; deponiso, nec citra hunc amnem trajicito* 「古代ローマでは、軍隊がこの川を渡ってイタリア側に入るときは武装を解かねばならないとされていた。前49年1月10日、属州ガリアの長官であったカエサルはその禁を破り〈賽（さい）は投げられた *Jacta alea esto*〉の句を吐いて軍隊を率いて渡河し、ポンペイウスとの戦いに入ったという。」平凡社、『世界大百科事典』。この言葉はスエトニウス（Gaius Suetonius Tranquillus）（c.69-122以後）《ローマの伝記作家・歴史家》の伝記からの引用とされている。

17 Pisistratus (c.605B.C.-527B.C.)、アテネの僭主（紀元前561,556-555,546-527）。

18 Tymophanes または Timophanes. 紀元前366年、コリントの専制君主となったが暗殺された。Timoleon(411B.C.-337 B.C.) の兄。

19 Syracusians Syracuse シラクサーザ:イタリアのシシリー島南東部の港市、コリントの植民市として紀元前734年ごろに建設された。アテネとの戦争による戦場（415B.C.-413 B.C.）、第二ポエニ戦争時の戦場（212 B.C.）、シラクサ、シュラクサイとも言う。

20 Agathocles (361B.C.-289B.C.): シラクサーザの僭主（317B.C.-289B.C.）。

21 Marius, Gaius (c.155B.C.-86B.C.): 古代ローマの将軍・執政官。

22 Sylla Lucius Cornelius Sulla Felix (c.138B.C.-78BC). Sulla は“Silla”とも表記され、たまに“Sylla”とも表記されている。このパンフレットにおける綴りはこの最後の例。



- 23 Olivarotto di Fermo または Oliverotto da Fermo (1556-1613) マキャベリの『君主論』第8章「極悪非道な手段によって君主となった場合について」佐々木毅訳、講談社学術文庫、2004年参照。
- 24 Francesco Sforza (1401-66) ミラノ君主に成り上がった最も幸運な傭兵隊長。ムーツイオ・アッテンドロの庶子。ベネチアと戦うミラノ公フィリッポ・マリア・ビスコンティに仕えた。1434年教皇の弱点を利用してアンコナ辺境伯位を獲得。ミラノ公の庶出の唯一の娘ビアンカ・マリアと結婚後、47年彼女の父が死ぬと、辺境伯位を放棄して、ミラノ公爵位の相続を主張し、アンブロジオ共和政（アンブロジアナ共和国ともいう）を倒して権力を奪回した。54年ローディの和ののち彼の公爵位が確認される。文化人を援助し、自分の多くの子どもたちに人文主義的教育を受けさせた。マキャベリは『君主論』の中でこのスフォルツァ家の文人教育を、君主の非武装の弊害例として示している。平凡社、『世界大百科事典』。
- 25 Duke of Milain ミラノ公国は北イタリアのおもにロンバルディア地方を支配地とした公爵領。1395年ジャン・ガレアツォが皇帝から公爵位を授けられ、公国の歴史が始まる。同家の支配は広く中部イタリアの一部にまで及び、短期間（1447-50）アンブロジオ共和国が成立するが、これを倒したフランチェスコ・スフォルツァにより公国が受け継がれる。スフォルツァ家の支配は1535年まで続いた。
- 26 Christiern Christian II (1481-1559) はデンマーク王・ノルウェー王（1513-23）、スウェーデン王（1520-21）。デンマーク王権の強化を図ったが、封建貴族・聖職者の反発にあい亡命に追い込まれた。カルマル同盟からの離脱を図るスウェーデンに対して強圧策をとり、「ストックホルムの血浴」（1520）と呼ばれる粛清を行ったが、かえって強い反発を招き、カルマル同盟の崩壊を導いた。
- 27 「ストックホルムの血浴」と呼ばれる。1520年11月7日クリスチャン2世は、反乱の罪を赦すという声明を發し、スウェーデン側の貴族、僧侶、都市の自由市民の有力者たちを晩餐会に招いた。全員がストックホルムの王宮に入城すると、大扉は閉じられ、招かれた客は総て捕らえられた。翌11月8日、スウェーデンの有力者たちは次々に処刑され、その犠牲者の数は、100名を超えた。フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』
- 28 Gustavus Ericson グスタフ1世（Gustav I, Gustav Eriksson Vasa, 1495-1560）、1523年スウェーデン国会に選ばれて国王となる、在位1523-60）。ヴァーサ朝の祖。
- 29 原文は *unum magnum*。
- 30 Oliver Cromwell (1599-1658) イングランドの軍人・政治家。ピューリタン革命の指導者。護国卿（1653-58）。
- 31 James Harrington または Harington (1611-77) イングランドの政治思想家。  
*The Common-Wealth of Oceana* 『オシアナ共和国』（1656）の著者。
- 32 Brabant ブラバントまたはブラバン：ヨーロッパ西部の旧公国;現在はオランダ南部とベル

- ギー北部の地域に分かれている。
- 33 Flanders フランス北端部からベルギー西部にかけての地方で、北海、スヘルデ川、アルトア丘陵に囲まれた地域を指す。
- 34 the Medices 15～18世紀にフィレンツェを中心に栄えたイタリアの財閥。
- 35 Lewis the XI (1423-83)、バロア朝第6代のフランス王 (1461-83)。シャルル7世の子。
- 36 Tuscany イタリア中西部の州：もと大公国 (1532-1860)：州都 Florence。
- 37 Biscay=Vizcaya ビスカヤ《スペイン北部 Biscay 湾沿岸の県》。
- 38 the Grisons グリゾンまたはグラウビュンデン《スイス東部の州》。
- 39 Genoa ジェノアまたはジェノバ：イタリア ミラノ南方の港市。
- 40 イタリア南部、シチリア島南東部にある同名県の県都。
- 41 Charles I (1600-49) イングランド、スチュアート朝の国王 (1625-49)。清教徒革命により1649年1月30日、群衆の見守るなかで、ホワイトホール宮殿の迎賓館の外で処刑された。
- 42 James II (1633-1701) 反動的政策により結果的に名誉革命の直接の原因を作ったイングランド後期スチュアート朝の国王 (1685-88)。チャールズ二世の弟で即位まではヨーク公と称した。
- 43 James Scott, Duke of Monmouth (1649-85) チャールズ二世の庶子。1685年 ジェイムズ二世が即位すると王位継承権を主張して反乱を起こし、小部隊を率いてイングランド南西部のライム・リージス (Lyme Regis) に上陸、セッジムーア (Sedgemoor) の戦に敗れて処刑された。
- 44 Pharsalia カエサルとポンペイウスの対立に端を発した前一世紀半ばの内乱での決戦地。
- 45 原文は *Arma tenenti Omnia dat qui justa negat*。
- 46 Boccaline または Trajano Boccalini (1556-1613) の風刺小説『バルナツソス詳報』*Ragguagli di Parnaso* (1612-13) の中のエピソードと思われる。
- 47 Samuel Johnson (1649-1703) と思われる。政治思想家。同姓同名の Dr. Johnson と区別するために “the Whig” と呼ばれることもある。*Julian the Apostate* (1682) でジェイムズ二世を攻撃した。名誉革命を支持した。
- 48 The Prince of Orange (1650-1702) ジェイムズ二世の娘、メアリと結婚しイングランドを共同統治、ウイリアム三世 (1689-1702) となる。
- 49 Falmouth イングランド Cornwall 州南部の港、保養地。
- 50 Land's end イングランド Cornwall 州の南西端にある岬、観光地。
- 51 Brest フランス西端の港市：1631年以降海軍基地。
- 52 Jersey イギリス海峡にある英領の島：Channel 諸島のうちで最大。
- 53 Guernsey, Isle of イギリス海峡にある Channel 諸島中の島。
- 54 Vaudois (スイスの) ボー (Vaud) 州生まれの人。

- 55 Catalonia カタロニアまたはカタルーニャ：スペイン北東部のフランスと地中海に接する地方。
- 56 Pelopidas (?-364B.C.): 古代ギリシアのテーベの将軍・政治家;エパメイノンダスと共にスパルタ軍を破った (371B.C.-369B.C.)。
- 57 Epaminondas エパメイノンダスまたはエパミノンダス (418B.C.?-362B.C.): 古代ギリシアのテーベの将軍・政治家：スパルタ軍を破りテーベの覇権を確立。
- 58 Philopemen (253B.C.-184B.C.)、ギリシアの将軍。
- 59 Pensioner-Parliament イングランドのピューリタン革命で主要な役割を演じた議会。戦費に窮したチャールズ1世が〈短期議会〉の失敗後、その第5議会として1640年11月招集した。以後53年から59年までの中断期を除いて、60年まで続いたため、〈長期議会〉と呼ばれた。平凡社、『世界大百科事典』。
- 60 Machiavel Niccol Machiavelli (1469-1527)。イタリア、フィレンツェの外交官、政治思想家。彼は傭兵隊中心のイタリアの軍制を批判し、農民からなる軍隊の創設に力を尽くした。『君主論』(1532)の著者。
- 61 Francis Bacon (1561-1626)
- 62 *The Common-Wealth of Oceana* 『オシアナ共和国』、1656。以下のURLで参照可能。  
<http://www.marxists.org/reference/archive/harrington-james/1656/oceana/ch04.htm>
- 63 原文は Enfin si on veut ruiner Les Anglois il suffit de les obliger a tenir des Troupes sur pied.
- 64 Elizabeth I (1533-1603) イングランド、チューダー朝の女王 (1558-1603)。
- 65 Jacobite 名誉革命 (1688-89) によってイングランド国王ジェームズ2世が事実上退位を強制され、フランスへ亡命した後も、引き続き同王とその直系の子孫を正統な君主として支持した人々。ジェームズのラテン語形 Jacobus にちなみジャコバイトと呼ばれた。
- 66 Duke of Alanson Hercule François, Duc d'Alençon et Anjou, (1555-1584) フランス、ヴァロワ家の貴公子で、メアリー・オブ・ギースの血縁。アランソン公の称号を持っていたが、兄のアンジュー公がアンリ三世として即位したためその称号を継いだ。1579年にエリザベス女王に結婚の申し込みをするためにイングランドを訪れている。
- 67 Sir Joseph Williamson (1633-1701) 1678年11月18日、下院によりロンドン塔へ送られたが、数時間後にチャールズ二世の命令により解放された。
- 68 The Tower 「ロンドン塔」当時、国事犯の牢獄として使用されていた。
- 69 General Monk, George (1608-70)、イングランドの将軍。1660年クロムウェル政権崩壊後の混乱の中を軍を率いてロンドンに入り、亡命中のチャールズ二世と交渉、仮議会を召集して王政復古の準備を整えた。その功により公爵となった。

タイトル頁の訳

常備軍は自由な政府とは調和せず、イングランドの王制にとって決定的に有害であることを示す主張

戦いに優れた鹿は共有の草地から馬を追い出した。

長い戦いにおいて、優勢になるまで

馬は人間の力に救いを求めた、その結果、手綱を付けられることになった。

しかし力強い勝利者は、敵から学んだ後にも、

背中からは騎手を、口からは手綱を取り去らなかった。

ホラチウス 『書簡』10

ロンドン 1697年印刷